

禪の友

11
2023





ご本山だより 大本山永平寺【香菜漬け作務】

きょうさい

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二



例年、十一月の終わりに香菜漬け作務を行います。香菜とはお漬物のことです。修行僧が食べる一年分の漬物をこの時期に漬けるのです。

今年は約二〇〇〇本の大根を用いる予定です。しっかりと漬けるためには隙間なく大根を詰めていかなければなりません。そのため、足袋を履いた修行僧が漬物樽の中に入り、上から大根を踏み重ねていきます。

大根の葉も全て使い切ります。樽に詰められた大根の上に葉を重ねていくのです。その上に樽の蓋や重しをのせれば、傾くことなく安定して置くことが出来るようになります。更には、幾重にも重ねられた葉自体が蓋と同じ役割をするようになります。食材の個性を活かし無駄なく使いきる先人たちの知恵と言えましょう。

ところで、なぜお漬物のことを香菜というのでしょうか。『禅学大辞典』『曹洞宗大辞典』によると、『維摩経』というお経にその故事があるそうです。言葉ではなく、香りをもつて人々を導く香積如来のもとで食べられているものが香飯、香汁、そして香菜です。そうした食べ物と維摩居士が香積如来のもとから頂いてきて、僧侶に供養したのがその由来です。まさに香積如来の教えそのものを私たちはいただいているということです。普段から偈文を唱え、作法どおりに丁寧に食事を頂いてきたつもりではいましたが、さらに大切に頂かなければならないことが分かりました。

漬けこんだ香菜は五月ごろから食事に用い始めます。どんな香りになるのでしょうか。今からとても楽しみです。



ご本山だより

大本山總持寺

【つるみ夢ひろば in 總持寺】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二二



十月の總持寺開祖瑩山禪師の御遺忌と七〇〇回大遠忌予修法要も無事円成致しました。

今月も全国より大勢の檀信徒の方々が参詣に來られ多忙な月になりそうです。

霜月の異名を持つ十一月ですが、これは「霜降り月」が省略されて「霜月」に転じたとされています。陰曆十一月を陽曆に当てはめると十一月下旬から一月上旬になり、ちょうど霜が降りるところとなるわけです。

あの六月から続いていた酷暑も懐かしくさえ感じられることとなりました。

この十一月五日は今から一二年前の明治四十四年に總持寺が鳳至郡門前町（現在の輪島市）から鶴見へ移転し、遷祖式が現在工事中の放光堂で盛大に行われた日です。この日、開祖瑩山禪師・二祖峨山禪師をはじめ歴代の御眞牌（お位牌）が門前町から移され、正式に本山が移転したことになっ

た日であります。これを機に毎年行われていた「ご移転記念行持」「つるみ夢ひろば in 總持寺」は四年ぶりに十一月三日（祝）の十時より十五時の予定で開催される運びとなりました。華道展、茶席、書道展、小池緋扇人形展、參道でのバザールそして今回は大遠忌に因んで御移転パネル展が予定されており、總持寺移転の歴史を見ることができます。またこの御移転の大事業を成し遂げた独住第四世石川素童禪師は奇しくも十一月十六日のご命日であり、感謝と報恩の誠を感じずにはおれません。

この式典が終わると十三日からは「制中五則」に入り、様々な特別行持が修行され、最終日にはクライマックスの「首座法戦式」が行われます。そして二十一日は開祖瑩山禪師の降誕会（誕生日）の法要が終わると、いよいよ十二月に入り、臘八摂心を迎えることとなります。

選・坊城俊樹

一望の海を抑へてみる良夜

大阪府 柏原 才子

評「良夜」とは旧暦八月十五日の名月の夜のこ
と。やはりその頃の夜は澄んでいるのだろう。
煌々たる月光が一望の海を支配している景色
が見えてくる。「徒然草」にもその夜は清明な
るため月と遊ぶには絶好の日であるというこ
とを言っている。

墓洗ふ手相祖父似の柀掛筋ますかけすじ

宮城県 金升 富美子

評「柀掛筋」とは掌を横に貫く線のことを言うら
しい。それが祖父のものと似ている。生前に
祖父とそんなことを話し合ったことがあった
のだろう。墓を洗っている時ふとそれを思い
出した。お祖父さまとのとても大切な二人の
思い出。

◆ 鳳仙花幼き頃の瓜の色

山口県 稲村みどり

◆ 友還らず虹消ゆるまでしやがみこむ

岩手県 阿部 潔子

◆ 新盆に借りたる傘を返しけり

埼玉県 中島 由美子

◆ ピツチャーの区長サイダーラツパ飲み

静岡県 末光 愛正

◆ はいはいは天道虫に導かれ

神奈川県 佐野 勇

◆ 土用波サーファー嬉々と乗りこなし

神奈川県 吉田 明彦

◆ 禅堂の静寂を揺らし一葉落つ

兵庫県 片岡 橙更

◆ 流れ星一縷の希み消えゆきて

宮城県 花巻 直子

◆ 仰向けに蟬の足のみ動きけり

東京都 榎本 由美子

◆ 鮑盾足で払ひて三尺履

東京都 鈴木 英治

選者吟

仲見世に小鳥招きぬまねき猫

俊樹

作句小見

浅草の仲見世の商店街にある招き猫の置物。その手はあ
たかも小鳥を捕るために招いているように感じた。しかし実際の仲見
世はそれどころではない大混雑。世界からあらゆる人種の人たちが
ごったがえす。コロナ禍の反動はこんな所にも。

選・長澤ちづ

冷房の部屋でそうめんすすする手を止めて
黙禱終戦記念日

群馬県 松本 さえ子

評 戦後七十八年。平和な日本に暮らす人々の大方は、この作者のような状況で終戦記念日を迎えに違いない。だが、多くの犠牲の上に今の平和があることを忘れてはならない。快適な部屋で食にも足りてと忸怩たる思いが一首には籠る。

原爆投下のその日生まれた妹は尼僧となりて慎ましく存り

静岡県 杉原 氏子

評 作者の妹さんが、どんな人生を経た後に仏門に入られたかは定かではないが、枕詞のように上の句に詠われる女性の物語を思わずには居られない。奥行きのある一首である。

◆ 軽トラで逃げ水を追う山の道踊る狐に警笛鳴らし

岩手県 関合新一

◆ 何ほどのこともあらざり生かされて白寿迎えて今日の青空

愛知県 深谷ハネ子

◆ 打ち聞く花火の燦もどよめきも地上の花とし月は澄みたり

北海道 菅原三江水

◆ 玉章たますけの古称ゆかしく道の辺にレースの花を張るからすうり

埼玉県 白藤巳玲

◆ 稟議書の見せ消ちの多寡で昼飯を奢り奢られ割勘もしたな

島根県 横山 稔吾

◆ 川岸に水面を見つめいしアオサギの目にもとまらぬ狩の速さよ

長野県 山崎さと子

◆ 夕雨のはげしくなりて用意せし松根の束の門火を焚けず

岩手県 阿部 照子

◆ 亡き夫の植えしと聞けば目に優し峠の家のハマナスの紅

山口県 濱田 道子

◆ 初盆と心をよせてふるさとへ母なき家に一人たたずむ

京都府 三浦 大示

◆ ふるさとを捨て来し耳にケータイの着信故郷曲幽かなり

兵庫県 前田 あつ子

選者詠

狂ふれるがに浜風おらぶ渚辺をけもののごとく

逃げ行く帽子

ちづ

作歌小見

関合さんの「逃げ水」と「踊る狐」の虚実あやしいの間が妙。深谷さんの「青空」の何と澄明なことでしょう。関合さんは一〇〇歳、深谷さんは白寿を迎えた九十九歳の方。毎月、関連な作品を寄せて

くださいます。